

## 「愁鬢詞」本文校定：活字本の危うさ

後藤，昭雄  
成城大学教授

<https://doi.org/10.15017/10289>

---

出版情報：語文研究. 103, pp.1-9, 2007-06-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 「愁鬢詞」本文校定

—活字本の危うさ—

## 後藤昭雄

の句切りを誤っていることを指摘した（後述）。しかし、底本（影印本）と対比してみると、それだけでなく、翻刻、句読には少なからぬ誤りがある。これを訂して正しい本文を提示することが本論の目的である。

### 二

「愁鬢詞」には序がある。その序とともに「愁鬢詞」の国史大系本の本文を示すと、次のとおりである（右に付した×については後述）。

平安末期に三善為康によって編纂された『朝野群載』は、三十卷（現存二十一卷）のうち、巻一―三を「文筆」上中下として、平安朝に制作された漢詩文を収載する。文体ごとにまとめられていて、その一つに「辞」（巻一）があり、三首が引載されているが、そのなかの一首に「愁鬢詞并序」がある。

今、我々が『朝野群載』所収作品を読む時は、ほぼ間違いなく新訂増補国史大系本（以下、国史大系本）に拠ると思われる。以前に、平安朝漢文の文体研究という視点から、文筆部の諸作品を概観したが、その時は、国史大系本は「愁鬢詞

愁鬢詞并序

木工助藤敦隆

愁歎之者傷<sup>レ</sup>情。令<sup>ニ</sup>形<sup>一</sup>早考。苦辛之者必損<sup>レ</sup>性。令<sup>ニ</sup>氣<sup>一</sup>先

衰。予<sub>レ</sub>倫<sub>レ</sub>屈<sub>レ</sub>年久。豈不<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>情乎。風痺日積。豈不<sub>レ</sub>損<sub>レ</sub>性乎。是故未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>廿九<sub>一</sub>。同<sub>二</sub>顔子之類<sub>一</sub>。亦先<sub>二</sub>卅<sub>一</sub>。類<sub>二</sub>潘郎之鬢<sub>一</sub>。況乎漸過<sub>二</sub>強仕<sub>一</sub>也。近<sub>二</sub>知命<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>霜成<sub>一</sub>雪。變<sub>レ</sub>斑爲<sub>レ</sub>白。滿鏡撩乱矣。訝<sub>二</sub>黑翟之見<sub>一</sub>。然隨<sub>レ</sub>梳灑落焉。似<sub>二</sub>皓鸞之振<sub>一</sub>。甚矣予之衰也。其奈老之至何。仍聊祝<sub>二</sub>素髮於茶花<sub>一</sub>。述<sub>二</sub>怨諸於言葉<sub>一</sub>云<sub>レ</sub>尔。

聞説愁人鬢早衰。不<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>年悲哉。年亦老。滿頭弥<sub>レ</sub>皤然。

この本文の底本は猪熊本と称される古写の善本である。現在は國學院大學所蔵。国史大系本の凡例に次のようにある。

猪熊信男氏所蔵本は卷第一のみにして、卷子本、天地界のみありて、鎌倉時代の初期を下らざるものにして、流布の諸本に逸せる所を存して頗る原形に近きものと謂ふべし。

国史大系本は卷一はこの猪熊本を底本としているが、本書は早く一九二六年に「古簡集影」（東京帝国大学史料編纂掛編）の一冊として影印本が刊行されている。なお「愁鬢詞」は凡例にいう「流布の諸本に逸せる所を存して」いるうちの一首である。つまり猪熊本にのみある。

「古簡集影」によって猪熊本「愁鬢詞」の書影を示す（次頁）。

先に示した国史大系本の本文で、右にxを付したものは翻刻の誤りである。猪熊本の影印に、これに該当する文字に右に傍線を付し、ア・イ以下の記号を付けた。一つずつ検討して正しい本文を定めていこう。

(1) 影印3行目のアとイ、これは関連する。国史大系本はどちらも「令」と読む。以下、くずし字の例示は、北川博邦編「日本名跡大字典」（角川書店、一九八一年）を用いるが、アはその「令」のくずし字、図版aのような字形と判断したのである。そうすると、イも同じ「令」

のくずし字と見ることになるが、まず字形がアと異なるうえ、これを一字と見るには



行末の空白があり過ぎる。なお、図版にすると白くなってしまつが、影印で見ると、ここは虫損によって文字が欠けているのである。イは（またアも）一字ではなく二字と考えるべきである。アの字形を考え合わせると、これは踊り字二字「ㄥㄥ」と見るべきである。すなわちアは「傷情」の、イは「損性」のくり返しである。

(2) 4行目のウ。国史大系本は「倫」と読むが、「倫屈」では熟語として意味をなさない。これは語の意味を考えて、さんずい偏の「淪」と判読すべきである。「淪屈」は落ちぶれて伸びられないという意。

怨曠詞 羊席

木工 李昉 蘇敬隆

愁歎之者傷情、形早老苦辛、者之損性、  
 氣先衰、予偷生年久、寧不傷情乎、凡瘁曰積、豈  
 不損性乎、是故未及死、同顏子、夏之先、卅二類、潘郎  
 騎兒辛、漸過、佳仕之、迎知命、從霜、成雪、更、  
 白滿鏡、擗亂矣、訝里、翟、鬼、絲、隨、梳、麗、  
 根、毛、託、其、矣、予、之、衰、也、其、奈、老、自、  
 於、奈、花、連、絲、緒、於、言、  
 聞、說、愁、人、曠、早、衰、不、行、年、也、我、年、  
 之、老、滿、頭、添、  
 也

(3) 5行目の工。国史大系本は「類」とするが、疑問である。まず字形から。字の左側は虫損によってほとんど欠けているが、なお左上に「・」という残画がある。「類」は同じ行の下から3字目にあるが、これによれば文字の左上に「・」という残画は残りえない。

次に対偶から考えてみよう。この前後は、

「未<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>廿九、同<sup>ニ</sup>顔子之

亦先<sup>ニ</sup>卅二、類<sup>ニ</sup>潘郎之鬢

という隔句対である。を「類」とすると「類」と「鬢」とが対語をなすということになるが、「類」という概念を表す語と「鬢」という身体の一部をいう語とでは、正しい意味での対語とはなりえない。「鬢」に対しては、同じく身体に関する語であるべきであろう。

また典故から考える。「未及廿九、同顔子之」（未だ二十九に及ばざるに、顔子の 同じ）は、『史記』卷六十七、仲尼弟子列伝の顔回伝の「回年二十九、髮尽白、蚤死（回年二十九にして、髮<sup>しつ</sup>尽く白く、蚤<sup>はや</sup>く死す）」を踏まえる。

以上の諸点から、国史大系本が「類」とする字は「頭」と判読すべきである。なお「頭」は10行目の下から4字目にもある。

(4) 6行目の才。国史大系本は「也」と読む。そうして

漸過<sup>ニ</sup>強仕<sup>ニ</sup>也。近<sup>ニ</sup>知命<sup>ニ</sup>。

と句点と返り点を付すが、語句の意味を考える必要がある。「強仕」「知命」はともに年齢を示す語である。「強仕」は四十歳（『礼記』曲礼）、「知命」は五十歳（『論語』為政）をいう。ともに年齢をいう「強仕」と「知命」とが近接して置かれていて、こども対句をなしているのではないかと考えられる。すなわち5—3と句切るのではなく、4—4と句切るべきであろう。

漸過<sup>ニ</sup>強仕<sup>ニ</sup>

也近<sup>ニ</sup>知命<sup>ニ</sup>

となるが、このままでは「也」が読めない。「漸」は副詞であるから、「也」とされている字も副詞であるはずで、その目で才を見直さなければならぬ。正しくは「已」である。図版<sup>レ</sup>参照。これによって、

漸<sup>ク</sup>強仕を過ぎ、

已<sup>ニ</sup>知命に近し。

と読むことになる。

(5) 7行目の力。国史大系本は「然」。しかし、まず字形から見て疑問である。「然」は10行目の末尾にあるが、これと比べて、明らかに異なる。では何という字と考えるべきか。別の視点から考えてみよう。

  
b「已」

ここでも対偶に注目して、そのことが分かるように本文をあげてみると、

満鏡撩乱矣、訝黒翟之見

―随梳灑落焉、似皓鶴之振毳

となる。傍線を付した「然」と「毳」を除いた部分は、一見したところでも対偶をなしているようである。左右同じ位置にある文字は、2字目の「鏡」＝名詞と「梳」＝動詞（くしける）が外れるが、他は同じ性質の文字で、よく対応している。そうすると「然」と「毳」が問題である。どう考えればいいか。

まず機械的であるが、「然」を右の行に移して「見」の下に置くと、字数はそろつ。しかし、「然」と「毳」とでは字義の上で対応しない。「毳（鳥の腹毛）」の対語としては名詞でなければならぬ。「然」が字形としてもそうではないらしいことは先に確認した。

国史大系本が「然」と判読したものを名詞である文字として読まなければならぬが、それを考えるには、当然のこととして、この語を含む文句の意味を考えなければならぬ。ところが、それを考えていくうえで一つ問題がある。ここには原本に誤写があるのである。ただし、先に述べたように、この作品は猪熊本のみにあるものであるから、他本と対校し

て正すという方法はとり得ず、この本文を熟視するほかないが、「黒」は本来「墨」であるはずである。つまり「墨翟」で、すなわち墨子であり、ここは墨子についての故事を踏まえているのである。『蒙求』に「墨子悲絲（墨子絲を悲しむ）」の句があり、注に「淮南子に曰はく」として、

墨子見練絲而泣之。為其可以黃可以黒

（墨子練絲を見て之に泣く。其の以て黄なるべく以て黒なるべき為なり）。

という。『淮南子』の「説林訓」に見える。墨子は白いままの糸を見て、染めようで黄色にも黒にも染まると泣いたという。これに基づく表現である。

結論として、これは「絲」である。図版C参照。

  
C.「絲」

なお、先に「―」が外れるが、他は同じ性質の文字で、よく対応している」と述べたが、これについて、ここで付言しておく。それは「墨翟」と「皓鶴」の対についてである。今述べたように、墨翟は人名である。それに対して、皓鶴は白い鶴、つまり動物である。人名と動物とは異質のものとなり、対語としてバランスを欠いているかに見える。しかしそうではない。墨翟はいわゆる懸詞なのである。翟は本来の意は鳥のきじ（キジ）。そうすると、これを修飾する墨は黒の意で、すなわち墨翟は黒いきじとなる。この意味でもある。

この意味の墨翟は皓鶴とびたりとした対語となる。

(6) 9行目のキ。国史大系本は「諸」。字形としてはそう読めるが、「怨諸」ではどう理解すべきか、疑問である。語の意味を考えて、原本の文字をもう一度見直すと、まずは言偏と見えるが、糸偏と見ることも可能である(図版d参照)。そうすると「怨緒」となる。怨緒は恨みの思い。紀齊名の「落葉賦」(『本朝文粹』巻一)に、「憂心恍然として、怨緒蕭然たり」の用例がある。

渚 仔  
d「経」  
下は

(7) 9行目のク。国史大系本はここに「尔」の字を置く。正字体は「爾」。そうすると「云尔(爾)」となるが、この云爾(「しかいふ」あるいは「いふことしかり」)は序、ことに詩序の結びとして常用の語である。したがって、この序でもこの語で結ばれていて何の不思議もない。むしろ当然である。国史大系本の校定者はそう判断したのだから、原本にはここに文字はない。虫損の跡は残るが、上の「云」と見比べて、ここにはもともと文字は書かれていなかった。この序は「云」という形で結ばれていた。

(8) 10行目のケ。国史大系本は「皤」とするが、これは「皤」と読むべきだろう。偏の「白」が「皓」という字体で書かれる例はある。図版e参照。

皓  
e「皓」

「皤」と読むと「皤然」で、これは、ものの、ことに髪の色をいう。『和漢朗詠集』巻下、白に引く源順の詩に、

霜鶴沙鷗皆可愛 霜鶴沙鷗皆愛すべし

唯嫌年鬢漸皤然 唯嫌<sup>た</sup>少年鬢<sup>よっや</sup>の漸く皤然たるを

の用例がある。

以上の検討の結果として、猪熊本本文を原文に忠実に、行取りもそのままに翻刻すると次のとおりである。

なお、漢字の字体は「廿」「卅」「絲」以外は通行のものに改めた。蝕損によって文字が欠けている箇所は、で示し、残画から推測される文字は右に( )に入れてあげた。また国史大系本の翻刻を改めた箇所は傍線を付した。

1 愁鬢詞 并序

木工助藤敦隆

2 愁歎之者傷情々々形早老苦辛之者必損性々

3 氣先衰予淪屈年久豈不傷情乎風痺日積豈

4 不損性乎是故未及廿九同顔子<sup>(之)</sup>亦先卅二類潘郎

5 之鬢況乎漸過強仕已近知命從霜成雪斑斑為

6 白滿鏡撩乱矣訝黑翟之見絲隨梳灑落焉似皓鶴

7 之振鬣甚矣予之衰也其奈老之至<sup>(何)</sup>仍聊祝素髮

8 於茶花述怨緒於言葉<sup>(云)</sup>

三

翻刻に基づいて、校定本文を掲げるが、その前に、詩の句  
切りについて述べておかねばならない。（注）

第二節の初めに示したように、国史大系本は

聞説愁人鬢早衰。

不行年悲哉。

年亦老。

満頭弥幡然。

と句切りを施している。7・5・3・5の雑言詩と解したわけである。一見、意味を取るにもこれで差し支えはないようである。しかし、この句切りは詩の基本を見落している。詩は、いつまでもなく、韻文である。すなわち韻を踏む。ところが、この句切りはこれを無視していることになる。詩は押韻に着目して区切らなければならない。そうすると、次のようになる。

聞説愁人鬢。

早衰不行年。

悲哉年亦老。

満頭弥幡然。

五言詩である。「年」と「然」で韻（先韻）を踏んでいる。このことも加味して、序については対句の形がよく分かるように句形を整えて、校定本文を示す。

愁鬢詞 并序

木工助藤敦隆

愁歎之者 傷情 傷情形早老。

苦辛之者必損性、損性気先衰。

予淪屈年久、豈不傷情乎。

風痺日積、豈不損性乎。

是故、未及廿九、同顔子之頭、

亦先卅二、類潘郎之鬢、

況乎、

漸過強仕、

已近知命。

従霜成雪、

変斑為白。

満鏡撩乱矣、訝墨翟之見絲。

随梳灑落焉、似皓鶴之振毳。

甚矣予之衰也、其奈老之至何。

仍聊祝素髮於茶花、

述怨緒於言葉云。

聞説愁人鬢、

早衰不行年。

悲哉年亦老、

滿頭弥皤然。

このように形を整えると見えてくることがある。序の1行目の「者」の下に、次行の「必」と対応する副詞が欠けている。しかしそれが何であつたかは推測の手だてがない。それともう一つ、序の最終行の頭、「述」の上に、前行の「聊」に並ぶ箇所に、やはり副詞が欠けているかもしれない。ただし、これは前の場合ほど確かではない。ただ校定本文に基づいて訓読する。

愁鬢詞 並びに序

木工助 藤敦隆

愁歎の者は情を傷ましめ、情を傷ましむれば形早く老ゆ。苦辛の者は必ず性を損し、性を損すれば氣先づ衰ふ。予、淪屈して年久し、あに情を傷ましめざらんや。

風痺して日積もる、あに性を損せざらんや。

是の故に、未だ二十九に及ばざるに、顔子の頭に同じく、

また三十二に先んじて、潘郎の鬢かみに類なふ。

況んや、漸く強仕を過ぎ、已に知命に近きをや。霜より雪と成り、斑変じて白と為る。

鏡に満ちて撩乱す、墨翟の絲を見るかと訝る。

梳づるに随ひて灑落す、皓鶴の毳を振るに似たり。

甚だしいかな予の衰へたるや、其れ老の至るをいかにせん。仍て聊か素髪を茶花とかに祝ひ、怨緒を言葉に述べと云ふ。

聞くならく愁人の鬢は

早く衰ふるも行年せずと

悲しいかな年また老いたり

滿頭いよいよ皤然はせんたり

本論の目的は校定本文と訓読文を提示することである。語句の注釈や通釈には及ばない。

国史大系本には九つの翻刻およびそれに伴う句読の誤りがある。一首の作品にあつては多過ぎる。これは特殊な例かもしれない。しかし、活字本を用いるに当たつて、心すべき事実である。また翻刻するに当たつて、他山の石とすべき事柄である。

注

- 注1 拙稿「『朝野群載』文筆部考―文体論の視点から―」（『国語と国文学』八二巻五号、二〇〇五年）
- 注2 大阪大学大学院における演習での村山識君の指摘による。
- 注3 このことは注1の拙稿でも述べたが、本文校定作業の一環として再説する。

（ごとう）あきお・成城大学教授